

(2) 考察とまとめ

子供たちの思い・教師の願い・教材観(ヒト・モノ・コトのよさ)を勘案しながら単元づくりをしていくことは、子供たちを夢中にするにつながる。また、このようにして生み出された単元は、子供の関心や疑問を抛り所とすることから、子供の活動への意欲が高まる。学習も真剣なものとなりやすく、学んだ内容も生きて働くものとなることが多い。子供主体の学習の中で、教師が意図する学習を効果的に行っていくためには、学習の展開における子供の意識や活動の向かう方向を的確に予測することや十分な教材研究が必要になってくる。子供が夢中になるきっかけや問いかけ、手立てを講じていくのが教師の役割となってくる。本校の子供たちのビジョンとして、①必要感・切実感をもつ子、②主体的に学ぶ子、③自分の生き方に活かす子を目指しながら授業を行った。それぞれの考察とまとめについては、以下の通りとなる。

【必要感・切実感をもつ子について】

その場に行くことで得られる気付きや疑問つまり本物に触れることは子供たちの学習の密度を濃くするものとなっていた。子供たちが何となく知っていることや感じている抽象的なモノやコトが具体的なモノやコトになり、本気の課題を生むことにつながっていた。よりよい表現活動をするためには、体験活動の充実が欠かせない。子供たちにとっての実体験は、机上で勉強しているだけでは感じ取ることのできない人とのつながり、周囲の様子など多くの気付きや疑問を生み出すことが分かった。そこから創っていく課題は、子供たちに必要感や切実感をもたせるものとなっていた。

【主体的に学ぶ子について】

課題の解決の見通しとしてどのように授業をつくっていくのか(計画)、解決するために必要な知識は何か、得た知識をどのように活用・発揮して解決していくのか、子供たちと同じ目線になって教師も楽しみながら授業をすることができた。教師がファシリテーターとして子供たちの思いを汲み授業をデザインしていくことで、子供たちの内なる心に火をつけ、「もっとやってみよう！」を掻き立て夢中になっていた。また、その中で子供たちへの価値付け・方向付け・意味付けは大きな効用を齎していた。1回1回の授業で、目の前の子供たちの様子を記録し、教師が問い返したり、手立てを施したりすることの大切さも感じた。座席表やICT機器を用いて児童の様子・振り返りを記録し把握しておくことで、教師のアプローチが子供たちに寄り添ったものとなっていた。どのような問い返しをすれば引き出す・広げる・つなげることができるだろうか、ヒトやモノとの出会いの場をつくる等どのような手立てをすればよいだろうか思考する示唆を与えていたように思う。生活科・総合的な学習の時間の授業をする中で、子供の姿をいかによく見取っていくかが非常に重要だということを実感した。

【自分の生き方に活かす子について】

子供たちが何をどのような方法で学び、何ができるようになるのかを教師の方で想像力や創造力を働かせながら今後の学習や生活につながるものとなるよう意識し単元や授業づくりをした。生活科・総合的な学習の時間の授業は1時間で成り立つものではなく、1時間1時間の積み重ねによって構築される。単元という長い道のりの中で学習したことが、未知の世界に足を踏み入れる時の助けになったり、問題に直面した時に解決するための手がかりになったり等さらに長い人生に活かされる場面も数多くあると考えている。いつ・どこで・何が活用されるか分からないが、生活科・総合的な学習の時間の授業を通して得た知識や解決方法等は子供たちの生活に潤いを与えるに違いない。

これから求められる力は論理的に考え、他者に分かりやすく表現する力などの汎用的能力である。従来の(より多くの知識を蓄え、安定的に再生できる)キャッチアップの時代から今は(様々な知識や情報を活用して目の前の問題を他者と共に解決していく)イノベーションの時代へと変化した。それぞれの手元に正確で大量の情報が瞬時に届く社会となった。一つ一つの事実に基づく知識を実際の生活場面や問題場面で活

用できることが求められるようになっている。そう考えると、生活科・総合的な学習の時間は、今の時代において非常に重要性が高い教科と言える。